

ので、この点は更に大量の標本を、あらゆる点から再検査する必要があると思う。また筆者が *P. vittata* f. *reagens* の仮名で表示した Sikkim 産の一種は形態的には一応 *vittata* に入るべきものであるが、PD+, 即ちフィゾゲル酸を有し、かつフィゾド酸を欠いているで、別種のもの感を深くする。また Sikkim-Himalaya 産の *P. hypotrypa* を検査している内に、外形は *hypotrypa* その物であるが、アトラノリンとフィゾド酸及びその附随成分を含むものが見付かった。これは朝比奈博士によって *P. pseudo-hypotrypa* As. と命名されたので附記した。なお *Hypogymnia* 亜属ではないが、フィゾド酸を有する外国産の *P. furfuracea* (L.) Ach. も *vittata* 型のクロマトグラムを与え、R.f. \approx 0.5 の附随成分があり、また *Cetraria rugosa* (As.) Sato はウスニン酸とフィゾド酸及び、その附随成分が、また *Cetraria rhitidocarpa* Mont. (sensu Asahina) にもフィゾド酸とその附随成分のあることが判明した。なおこの2つの *Cetraria* は上記成分の他にある脂肪酸を含有する事はマイクロ化学的証明で既に知られている。

最後に、いつもながら、御懇切なる御指導を賜りました朝比奈泰彦博士に厚く御礼申し上げますと共に、照会に対し、労を惜しまれなかった Dr. Hale に感謝致します。

□ G.L. Withner (ed.): **The orchids; A scientific survey** pp. 684, figs. 88, pls. 61 many tabs. 1959, Ronald Press N.Y. 約 5,600 円 従来ラン科植物に関する単行本にはフロラやモノグラフの他には園芸学上の関心から書かれたもの以外にはなかった現状にかんがみ、この科に関する広い科学の諸領域に分散しているデータを一まとめにして提供したものである。研究史、分類、解剖、外部形態、発生、細胞、交配と遺伝、生理、菌根、光週期性及び光、病害及び特にバニラに関する諸章が 10 数名の専門家によって執筆され、文献の引用も多く読みごたえのある書である。付録には Schlechten の Key (in Notizb. bot. Gart. Mus. Berl. 9: 563-591) の英訳(亜族まで、多少の近代化あり)、染色体数の表とその数算出の技術、培養液表など実面的な面も配慮されている。(津山 尚)

□ 室井 綽: **タケ類(特性、観賞と栽培)** 437 pp., 148 図, 1963. 加島書店, ¥ 650 本書は富士竹類植物園長である室井博士の新著で、タケ類の性質やその観賞、栽培、利用にわたっている。竹の草行本には、古くは岡村尚謙の桂園竹譜(1828)、片山直人の日本竹譜や Sir Ernest Satow の The cultivation of Bamboos in Japan などがあるにしても、現在ではいづれも高嶺の花で、その後に出た坪井伊助の竹類図説(1914)でさえ容易に手に入らない。新しいものとしては竹内叔雄の竹の研究(1932)や随筆などがあり、またもっと新しいものでは室井氏の竹と笹(1956)、有用竹類図説(1962)などがあるが、今回の本はこれらを適当に取捨したような興味ある本でもあり、またタケの分類の大綱にもわたっているから学術と趣味の両面をかねている読みものである。(久内清孝)